

造形ワークショップを通じた大学と行政、地域の連携による 子育て支援に関する実践的研究

矢野 真 (児童学科・講師)

高垣マユミ (児童学科・教授)

田爪宏二 (子ども心理学科・准教授)

1. 問題と目的

(1) はじめに

近年、子どもをとりまく生活環境において、都市化、住環境の過密化による生活環境の変化、遊び場の喪失、子どもが被害をうける事件等、様々な問題が発生している。そのような中で、子どもと共に子育ての当事者である親においても、親自身のライフスタイルの変化、子育てをめぐる情報の多様化、核家族化による子育て文化の断絶や相談相手の不在、育児における様々なストレスなど、様々な変化や問題が生じている。大都市子育て環境研究会(2002)によれば、特に大都市部を中心として、子育て中の母親のストレスには生活空間や自然、空気、騒音といった物理的な環境問題以上に、生活習慣・人間関係やライフスタイルなどの人的、社会的な環境問題の影響が大きいこと、子育ての様々な環境に対して敏感になりがちで、ストレスを受けやすい状況にあることが指摘されている。

こうした子育てをめぐる情勢と、子育て支援に対するニーズの増加をふまえ、近年では地域、行政のなかで行われる子育て支援事業が活発化してきている。また松永(2005)が、子育て支援は「親が主体的に子育てをすることを支援すること」、そして「子育ての『労力』を市場で購入できる商品や福祉サービスに依存して解消しようとするのではなく、『労力』を引き受けて子育ての楽しさを実感できるように自立することを支援することである」と指摘するように、子育て支援活動においては、家庭の積極的な参加、すなわち親が主体的に、子どもと共に活動できる場を提供することが重要であると考えられる。

このような家庭と地域、行政との連携による子育て支援が行われるなかで、大学の参画、特に大学の持つ知的、人的資源に対する期待が高まりつつある。地域の子育て支援において大学が貢献できることを考えるとき、主に次の3点があげられる。すなわち、第1には行政や地域に対する、子育て支援事業や政策に対する理論的、学問的知見の提供である。第2には家庭、すなわち親に対する様々な情報提供や相談活動、さらには子ども(または親子)に対する遊びの提案、遊び場の提供といった、より実践的、直接的な支援である。第3には、保育者を志す学生など、子育て支援への有用なマンパワーの提供である。

このような背景のもと、鎌倉女子大学児童学部では、子育て支援にこれらの資源を有効に活用するという立場から、造形ワークショップである「こどもアート・キャラバン」事業を行政と大学との協力により立案・実施した。この事業は、指定管理者制度の導入により民間事業者(神奈川共立・共立・JSS共同事業体)が公共施設(栄区民文化センター・リリス)の運営を行うことになった横浜市栄区により、子育て支援の一環として大学と連携し、大学のもつ知的資源を提供した実践を通して、広く栄区の子育て支援に貢献することを目指したものである。

(2) 本研究の目的

本研究の目的は、横浜市栄区と鎌倉女子大学との連携事業による造形ワークショップである「こどもアート・キャラバン」の実践を通して、行政と地域住民、大学との連携による子育て支援について検討することである。この実践は栄区の行政と地域住民、そして大学との連携であると共に、子どもと親、教員と学生、学生と子ども、学生と親など、様々な子育て支援のあり方を考えることが可能な実践である。特に、実践を通じて、親に対してはどこまで子どもの造形に関わっていくかということについて明確にする場を提供し、子どもの造形やその援助に対する親の理解を高めていくことができる。同時に、学生に対しては教育・保育実習やボランティアにおいて子どもたちと接する機会はあるが、その親と接する機会は少ないという現状に対する一助となることが期待される。保育現場において、保育者は子どもだけではなく、保護者と接する力量も求められる。しかしながら、現場に出た学生が親とのトラブルや対処などをどうしたらよいかわからないという悩みも聞かれる。本研究は、学生をして子育て期にある親の実際の姿を理解させると共に、その親とのコミュニケーションの促進について実践を通して学ぶことにより、今日求められる子育て支援者としての保育者の資質を涵養する上で効果を持つといえよう。また、子どもの造形活動について、授業で学んで身につけた実践的な内容を用いることは、学生にとってよりスムーズに親と関わることのできる契機ともなるであろう。

親と子どもとが共に造形活動を行うことにより、親子の間に豊かなコミュニケーションが生まれる。また親は子どもの造形活動を通して子どもの持つ能力や、独特な世界観に触れることができ、これはより充実した子ども理解へとつながる。このように、親子のコミュニケーションの促進、大学のもつ知的資源の提供、さらには両者を結びつける場を提供する行政の役割という、実践活動を通じた子育て支援を提供する場をつくり上げていくことが、「こどもアート・キャラバン」の趣旨である。本研究では、上述した目的に基づき、アンケート調査による尺度評定法を用いた量的測定を中心に考察しながら、本稿の第1著者が実践者の立場から造形表現を通じた子育て支援について検討を加えていく。

2. 研究方法

(1) 事業計画

指定管理者制度の導入により民間事業者（神奈川共立・共立・JSS共同事業体）が公共施設（栄区民文化センター・リリス）の運営を行うことになった横浜市栄区からの要請を受け、開催時期・対象・対象施設・趣旨・事業予算などを決定するために綿密な打ち合わせが行われ、具体的な内容が決定された。

開催時期は、平成18年6月から平成19年3月までの間12回と、19年5月から12月までの間8回、3歳から5歳の幼児とその親を対象に造形活動を提案した。平成18年度は、①画用紙などに絵を描くことや、おりがみなどを貼り付けて楽しむことができる平面作品（Fig. 1）、②粘土を使って楽しむ立体作品（Fig. 2）、③作品に動きを取り入れた作品（Fig. 3）、④音を取り入れた作品（Fig. 4）の4項目に分け、その4項目を3回ずつ、計12回の造形ワークショップとして行った。平成19年度は、造形に音やリズムを含めた表現分野として広く捉え、「おととかたち」の1項目に絞り、様々な音とかたちの提案（Fig. 5・6）を行った。どちらの年度も受講した親にアンケート調査を実施し、意見を収集すると共に、アンケートに基づき活動実践の改善を行った。

ワークショップの時間は1講座につき1時間半～2時間を設定した。これは受講する子ども



Fig. 1 画用紙などに絵を描く平面作品

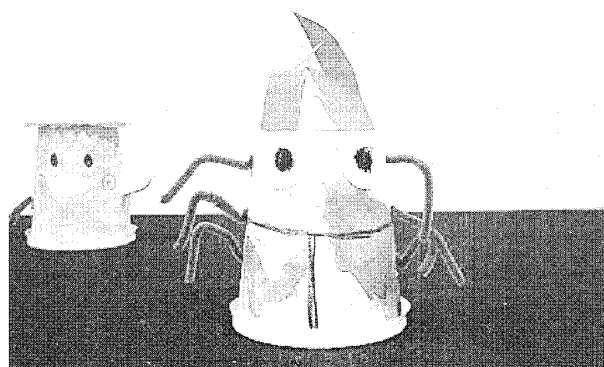


Fig. 4 音を取り入れた作品（虫のマラカス）

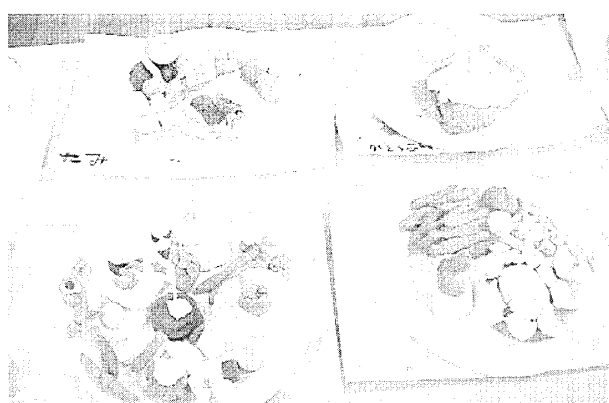


Fig. 2 粘土を使って楽しむ立体作品

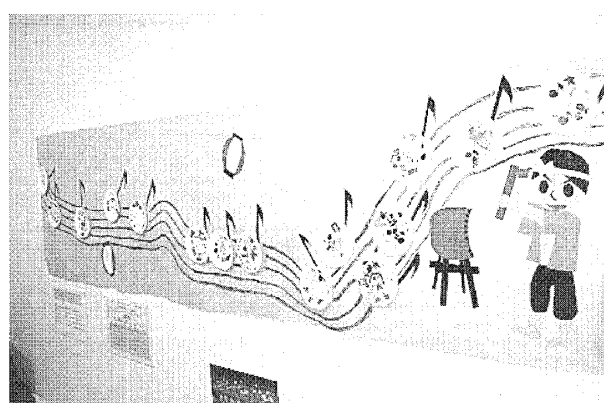


Fig. 5 音楽を聴いてかたちをつくる

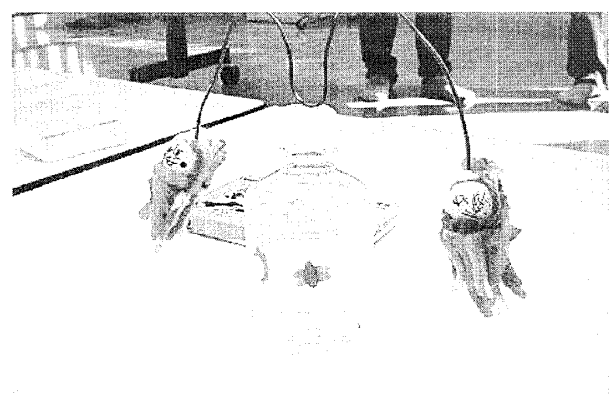


Fig. 3 作品に動きを取り入れた作品

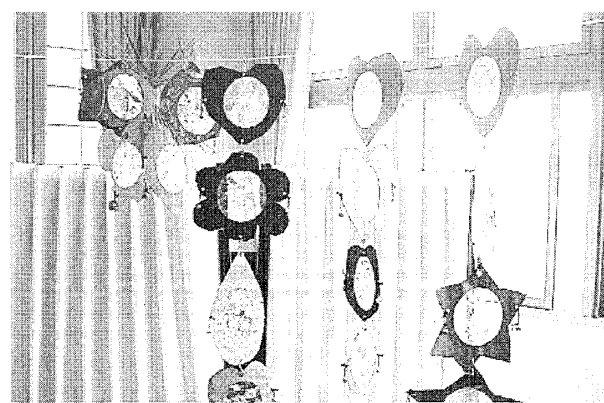


Fig. 6 光と風の音を楽しむ

たちの年齢により集中力も異なるため、その場に応じた対応を考慮したことによる。また、このワークショップの特色でもある、栄区民が平等に参加できるように特定の場所で開催するのではなく、栄区が管轄する地域ケアプラザや地区センターを中心に出張訪問を行うといった、新たな試みを提案した子育て支援であることが注目すべき点である（Table 1）。

（2）分析の視点

ワークショップの実践を通じた観察とアンケート調査から、次の点について考察を行う。

- ①どのようにすれば子どもたちが造形表現を通じて意欲や達成感を得ることができるか。そして、親は子どもたちと造形を通じてどのように関わっていけばよいか。

Table 1 実施内容

平成18年度			
	内 容	開催場所	実施日
第1回	季節をかたちに (あじさい) - 平面作品	小菅ヶ谷地域ケアプラザ	6月10日
第2回	動物たちの楽園 - 粘土を使った立体作品	笠間ケアプラザ	7月8日
第3回	海のなかまたち - 動きを取り入れた作品	小菅ヶ谷地域ケアプラザ	7月29日
第4回	いきものたちの音楽会 - 音を取り入れた作品	小菅ヶ谷地域ケアプラザ	7月30日
第5回	季節をかたちに (あさがお) - 平面作品	あーすプラザ保育室	8月26日
第6回	楽しいおべんとうづくり - 粘土を使った立体作品	小菅ヶ谷地域ケアプラザ	9月9日
第7回	みのむしゆらゆら - 動きを取り入れた作品	小菅ヶ谷地域ケアプラザ	10月14日
第8回	どうぶつかスタネット - 音を取り入れた作品	笠間会館	11月18日
第9回	季節をかたちに (クリスマス) - 平面作品	小菅ヶ谷地域ケアプラザ	12月9日
第10回	みんなコックさん - 粘土を使った立体作品	上郷地区センター	1月13日
第11回	カニさんゆらゆら - 動きを取り入れた作品	あーすプラザ保育室	2月10日
第12回	どうぶつたちの音楽会 - 音を取り入れた作品	本郷地区センター	3月10日
平成19年度 「おととかたち」			
	内 容	開催場所	実施日
第1回	春のかたちを音にしよう!	あーすプラザ保育室	5月13日
第2回	光と音をかたちにしよう!	豊田地域ケアプラザ	6月9日
第3回	光と音をかたちにしよう! II	笠間会館	7月14日
第4回	音とかたちで夏の思い出をつくろう!	本郷地区センター	8月25日
第5回	音のでるおもちゃをつくろう!	中野地域ケアプラザ	9月9日
第6回	秋のかたちを音にしよう!	笠間地域ケアプラザ	10月13日
第7回	楽器のかたち、音のかたち!	上郷地区センター	11月17日
第8回	冬のかたちを音にしよう!	豊田地区センター	12月8日

- ②保護者が造形に対してどのようなイメージをもち、そしてどのようなことに期待をしているか。
 ③学生が、子育て期にある親の実際の姿を理解することができるか。そして、その親とのコミュニケーションを促進するためには、どのような工夫が必要か。

3. 結果と考察

本研究では、造形ワークショップ「こどもアート・キャラバン」の実践である、平成18年度の12回と平成19年度の8回について、保護者を対象に実施したアンケート調査の分析、検討を行う。そこから浮かび上がった実践における効果や問題点、改善点について、実践者の立場から考察する。

(1) アンケートについて

各講座の実施後に保護者を対象にアンケートを実施した (Table 2)。アンケートの有効回答数は、212票 (平成18年度126票、19年度86票、複数回講座に参加しているも回答者もいるため、回答者数は延べ数である)。アンケートでは、以下の項目について調査を行った。

回答者および子どもの基本属性 アンケートのフェイスシートとして、回答者の年齢、子どもとの続柄、子どもの数、および、参加した子どもの年齢・性別、出生順位について質問した。結果をTable 3に示す。

Table 2 「アート・キャラバン」アンケート

- 1. あなたとお子さんのことについておたずねします。
 (下線部について、空欄に記入、もしくは選択肢に○を付して下さい)
- ①. あなたについて
 ・お子さんとの続柄(1.母親・2.父親・3.祖母・4.祖父・5.その他())
 ・年齢(24歳以下・25~29歳・30~34歳・35~39歳・40~44歳・45歳以上)
 ・お子さんの数 男子()人・女子()人
- ②. お子さんについて
 (本日参加したお子さんが2人以上いらっしゃる場合、年下のお子さんについてお書き下さい)
 ・年齢()歳()カ月 ・性別(男・女)
 ・出生順位(第1子・第2子・第3子・第4子以降)
- 2. 今回の講座でのお子さんの様子に関しておたずねします。以下の各質問について当てはまる番号に○をつけてお答えください。
 【5=はい、4=どちらかといえば はい、3=どちらともいえない/わからない、2=どちらかといえば いいえ、1=いいえ】
- | | |
|---|-----------|
| a. 活発で明るく、安全に活動することができましたか。 | 5-4-3-2-1 |
| b. 作品例や説明を通して、つくり方を理解することができましたか。 | 5-4-3-2-1 |
| c. 作品づくりに興味関心を持つことができましたか。 | 5-4-3-2-1 |
| d. 用具の使用や片付け、マナー等を理解することができましたか。 | 5-4-3-2-1 |
| e. 事前に考えたスケッチ等を具体的にかたちにすることができましたか。 | 5-4-3-2-1 |
| f. 自分のアイデアや思いを活かして自己を表現することができましたか。 | 5-4-3-2-1 |
| g. 時間配分にゆとりをもって取り組むことができましたか。 | 5-4-3-2-1 |
| h. つくっている最中にわからなくなるなど、困ったことがありましたか。 | 5-4-3-2-1 |
| i. 自信を持って制作に取り組むことができましたか。 | 5-4-3-2-1 |
| j. 作った作品に対して、感想を言ったり、保護者と話し合ったりしましたか。 | 5-4-3-2-1 |
| k. 活動の中に、色やかたちなどとの新たな出会いがありましたか。 | 5-4-3-2-1 |
| l. 他の子どもたちの作品と比べてみることなど、客観的に自分の作品を
みる
ることができましたか。 | 5-4-3-2-1 |
| m. 他の子どもたちや指導者とうまくかかわることができましたか。 | 5-4-3-2-1 |
| n. 叩く、振る、吹くなどの遊びを楽しみながら制作に取り組むことができましたか。 | 5-4-3-2-1 |
| o. 音の仕組みを自分なりに理解し、楽器作りを楽しむことができたか。 | 5-4-3-2-1 |
| p. 全体として、今回の活動には満足していましたか。 | 5-4-3-2-1 |
- * 本日のお子さんの活動の様子についての感想を自由にお書きください。
 ()
- 3. 今回の講座に参加された感想に関しておたずねします。以下の各質問について当てはまる番号に○をつけてお答えください。
 【5=はい、4=どちらかといえば はい、3=どちらともいえない/わからない、2=どちらかといえば いいえ、1=いいえ】
- | | |
|--|-----------|
| a. 子どもが活発で明るく安全に活動できるように援助することができましたか。 | 5-4-3-2-1 |
| b. 子どもの興味関心をもたせるような声掛けができましたか。 | 5-4-3-2-1 |
| c. 用具の使用や片付け、マナー等を子どもに理解させることができたか。 | 5-4-3-2-1 |
| d. 子どもが事前に考えたスケッチ等を具体的にかたちにするように援助する
ことが
できましたか。 | 5-4-3-2-1 |
| e. 子どもの考えたかたちを具体化するために、子どもと一緒に手順を考え、
制作に
取り組むことが
できましたか。 | 5-4-3-2-1 |
| f. 子どもが実行不可能な思いを実現しようとしていて、どのように援助したらよいか、
難しさ
を感じる
ことが
ありましたか。 | 5-4-3-2-1 |
| g. 材料・用具とその扱い等を理解することができましたか。 | 5-4-3-2-1 |
| h. 制作時間の配分にゆとりをもって取り組むことができたか。 | 5-4-3-2-1 |
| i. 子どもに自信をもたせるように、励ます、褒める、共感することができましたか。 | 5-4-3-2-1 |
| j. 自分の考えを子どもに押し付けずに、子どもの考えに共感しながら制作する
ことが
できましたか。 | 5-4-3-2-1 |
| k. 今回の活動は、子どもの創造性を発展させることにつながると感じましたか。 | 5-4-3-2-1 |
| l. 参加者と指導者、参加者同士と交流できましたか。 | 5-4-3-2-1 |
| m. 今回の活動は、地域コミュニケーションの輪をひろげ、豊かな人間づくりや社会
づくりに
貢献する
ものだと
思いますか。 | 5-4-3-2-1 |
| n. 今回の講座により、栄区の子育て支援事業に対する理解が深まりましたか。 | 5-4-3-2-1 |
| o. 全体として、今回の講座には満足することが出来ましたか。 | 5-4-3-2-1 |
| p. 今後、機会があればこのような活動には参加してみたいと思いますか。 | 5-4-3-2-1 |
- * 本日の講座への参加された感想についての感想を自由にお書きください。
 ()
- 4. 今後の講座へのご要望等、ご意見を自由にお書き下さい。

Table 3 回答者および子どもの基本属性

1. 回答者と子どもとの続柄

項目	平成18年度		平成19年度		合計	
	度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)
母親	112	(88.9)	74	(86.0)	186	(87.7)
父親	11	(8.7)	11	(12.8)	22	(10.4)
祖母	2	(1.6)	1	(1.2)	3	(1.4)
(無回答)	1	(0.8)	0	(0.0)	1	(0.5)
計	126	(100.0)	86	(100.0)	212	(100.0)

2. 回答者の年齢

項目	平成18年度		平成19年度		合計	
	度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)
24歳以下	2	(1.6)	0	(0.0)	2	(0.9)
25～29歳	3	(2.4)	6	(7.0)	9	(4.2)
30～34歳	57	(45.2)	32	(37.2)	89	(42.0)
35～39歳	44	(34.9)	32	(37.2)	76	(35.8)
40～44歳	7	(5.6)	13	(15.1)	20	(9.4)
45歳以上	2	(1.6)	2	(2.3)	4	(1.9)
(無回答)	11	(8.7)	1	(1.2)	12	(5.7)
計	126	(100.0)	86	(100.0)	212	(100.0)

3. 子どもの年齢

項目	平成18年度		平成19年度		合計	
	度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)
0歳	1	(0.8)	1	(1.2)	2	(0.9)
1歳	5	(4.0)	4	(4.7)	9	(4.2)
2歳	23	(18.3)	2	(2.3)	25	(11.8)
3歳	36	(28.6)	17	(19.8)	53	(25.0)
4歳	27	(21.4)	27	(31.4)	54	(25.5)
5歳	6	(4.8)	10	(11.6)	16	(7.5)
6歳	0	(0.0)	4	(4.7)	4	(1.9)
(無回答)	28	(22.2)	21	(24.4)	49	(23.1)
計	126	(100.0)	86	(100.0)	212	(100.0)

4. 子どもの性別

項目	平成18年度		平成19年度		合計	
	度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)
男児	45	(35.7)	32	(37.2)	77	(36.3)
女児	55	(43.7)	44	(51.2)	99	(46.7)
(無回答)	26	(20.6)	10	(11.6)	36	(17.0)
計	126	(100.0)	86	(100.0)	212	(100.0)

5. 出生順位

項目	平成18年度		平成19年度		合計	
	度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)
長子	55	(43.7)	49	(57.0)	104	(49.1)
第2子	43	(34.1)	22	(25.6)	65	(30.7)
第3子	1	(0.8)	3	(3.5)	4	(1.9)
(無回答)	27	(21.4)	12	(14.0)	39	(18.4)
計	126	(100.0)	86	(100.0)	212	(100.0)

講座における子どもの様子についての感想 講座における子どもの活動の取り組みの様子について、Table 4に示す質問項目に対して、「はい(5)」から「いいえ(1)」までの5段階評定を求めた。

講座に参加した感想 回答者自信が講座に参加した感想について、Table 5に示す質問項目に対して、「はい(5)」から「いいえ(1)」までの5段階評定を求めた。

また、アンケートの最後に、講座への感想、要望や意見についての自由記述欄を設けた。本稿では、尺度評定項目である、講座における子どもの様子についての感想および講座に参加した感想を中心に分析する。

(2) アンケートの分析結果

講座における子どもの様子についての感想 質問項目について、因子分析(主因子法、プロマクス回転解法、固有値1以上の因子を抽出、以下同じ)により項目を集約したところ、3因子から成ることが示された。なお、実施講座ごとに質問内容の異なる質問項目n(例:叩く、振る、吹くなどの遊びを楽しみながら制作に取り組むことができましたか)、項目o(例:音の仕組みを自分なりに理解し、楽器づくりを楽しむことができましたか)、及び総合的評価の項目である項目p「(子どもは)全体として、今回の活動には満足していましたか」は、因子分析においては除外した。項目因子負荷量0.35以上の項目を因子項目として、それぞれの因子に含まれる因子項目の特徴から、因子1を「作品、活動への理解」、因子2を「活動に対する関心、意欲」、因子3を「新しい体験」と命名した(Table 4)。

各質問項目においては、5段階評定において平均値が4を上回る項目が多く、本講座における活動内容は子どもにとって概ね有意義であったと捉えられていることが伺われる。年度ごとに

Table 4 「講座における子どもの様子についての感想」の質問項目および因子分析の結果、平均値と標準偏差

因子名	質問項目(註1)	因子1 因子2 因子3			全体(n=212) H18(n=126) H19(n=86) t (年度間の比較)			
		M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	t
因子1: 作品, 活動への理解	b. 作品例や説明を通して, つくり方を理解することができましたか。	.828	.094	-.147	4.14 (0.96)	4.04 (1.02)	4.29 (0.85)	1.87 +
	d. 用具の使用や片付け, マナー等を理解することができましたか。	.749	-.085	-.031	3.98 (1.07)	3.94 (1.10)	4.04 (1.04)	0.61
	e. 事前に考えたスケッチ等を具体的にかたちにすることができましたか。	.608	.221	.015	3.45 (1.15)	3.31 (1.14)	3.64 (1.13)	2.06 *
因子2: 活動に対する関心, 意欲	i. 自信を持って制作に取り組むことができましたか。	-.130	.591	.289	4.30 (0.88)	4.18 (0.89)	4.48 (0.85)	2.46 *
	g. 時間配分にゆとりをもって取り組むことができましたか。	.030	.585	-.124	4.19 (1.06)	4.13 (1.08)	4.28 (1.03)	0.97
	c. 作品づくりに興味関心を持つことができましたか。	.133	.584	-.071	4.56 (0.69)	4.54 (0.69)	4.58 (0.69)	0.42
	a. 活発で明るく, 安全に活動することができましたか。	.140	.503	.111	4.49 (0.76)	4.40 (0.78)	4.64 (0.71)	2.31 *
	f. 自分のアイデアや思いを活かして自己を表現することができましたか。	.330	.361	.094	4.05 (0.94)	3.94 (0.93)	4.22 (0.94)	2.18 *
因子3: 新しい体験	k. 活動の中に, 色やかたちなどとの新たな出会いがありましたか。	-.265	.101	.700	4.33 (0.83)	4.32 (0.86)	4.35 (0.78)	0.27
	l. 他の子どもたちの作品と比べてみることなど, 客観的に自分の作品をみるすることができましたか。	.434	-.307	.568	3.67 (1.21)	3.72 (1.15)	3.59 (1.28)	0.75
	h. つくっている最中にわからなくなるなど, 困ったことがありましたか。	-.337	-.084	.081	1.89 (1.21)	1.95 (1.25)	1.80 (1.15)	0.88
	j. 作った作品に対して, 感想を言ったり, 保護者と話し合ったりしましたか。	.325	.198	.058	4.17 (0.93)	4.12 (0.88)	4.25 (1.01)	0.97
	m. 他の子どもたちや指導者とうまくかわることができましたか。	.100	.206	.324	4.13 (0.95)	4.09 (0.92)	4.20 (0.98)	0.84
因子相関: 因子1-2=.530, 因子1-3=.461, 因子2-3=.438								
(因子分析から除外した項目)								
	n. 叩く, 振る, 吹くなどの遊びを楽しみながら制作に取り組むことができましたか。(註2)				4.53 (0.79)	4.46 (0.84)	4.64 (0.71)	1.64
	o. 音の仕組みを自分なりに理解し, 楽器づくりを楽しむことができましたか。(註2)				4.18 (1.05)	4.02 (1.12)	4.43 (0.88)	2.85 **
	p. 全体として, 今回の活動には満足していましたか。				4.78 (0.49)	4.73 (0.53)	4.86 (0.41)	1.98 *
(註1) 項目に付されたアルファベットは質問紙における順序を示す					** p < .01, * p < .05, + p < .10			
(註2) 項目n, oは講座内容ごとに異なるため, 項目の例を示す								

Table 5 「講座に参加した感想」の質問項目および因子分析の結果、平均値と標準偏差

因子名	質問項目(註3)	因子1 因子2 因子3			全体(n=212) H18(n=126) H19(n=86) t (年度間の比較)			
		M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	t
因子1: 子どもの意欲を高める援助	i. 子どもに自信をもたせるように, 励ます, 褒める, 共感することができましたか。	.765	.045	-.041	4.16 (0.84)	4.11 (0.82)	4.22 (0.86)	0.92
	h. 制作時間の配分にゆとりをもって取り組むことができましたか。	.641	-.245	.119	4.35 (1.00)	4.30 (1.01)	4.41 (1.00)	0.73
	a. 子どもが活発で明るく安全に活動できるように援助することができましたか。	.562	.252	-.030	4.35 (0.79)	4.26 (0.78)	4.48 (0.79)	1.95 +
	b. 子どもの興味関心をもたせるような声掛けができましたか。	.440	.401	-.083	4.09 (0.82)	4.03 (0.79)	4.17 (0.87)	1.24
	j. 自分の考えを子どもに押し付けずに, 子どもの考えに共感しながら制作することができましたか。	.434	.180	-.018	3.87 (0.99)	3.71 (0.99)	4.09 (0.95)	2.80 **
因子2: 子どもへの技術的な援助	f. 子どもが実行不可能な思いを実現しようとしていて, どのように援助したらよいか, 難しさを感じることがありましたか。	-.387	.018	.105	3.07 (1.38)	3.19 (1.34)	2.88 (1.42)	1.60
	k. 今回の活動は, 子どもの創造性を発展させることにつながると感じましたか。	.350	.084	.282	4.53 (0.68)	4.46 (0.65)	4.64 (0.71)	1.89 +
	d. 子どもが事前に考えたスケッチ等を具体的にかたちにするように援助することができましたか。	-.242	.978	.053	3.69 (1.02)	3.47 (0.99)	4.01 (0.98)	3.90 ***
	e. 子どもの考えたかたちを具体化するために, 子どもと一緒に手順を考え, 制作に取り組むことができましたか。	.296	.516	.033	4.06 (0.92)	3.94 (0.92)	4.24 (0.91)	2.27 *
因子3: 参加者, 地域との交流	c. 用具の使用や片付け, マナー等を子どもに理解させることができましたか。	.190	.462	-.017	3.97 (0.96)	3.87 (0.92)	4.13 (1.02)	1.96 +
	m. 今回の活動は, 地域コミュニケーションの輪をひろげ, 豊かな人間づくりや社会づくりに貢献するものだと思いますか。	.009	-.158	.903	4.53 (0.68)	4.50 (0.70)	4.58 (0.66)	0.85
	n. 今回の講座により, 栄区の子育て支援事業に対する理解が深まりましたか。	-.222	.211	.761	4.38 (0.76)	4.29 (0.80)	4.50 (0.68)	1.96 +
	l. 参加者と指導者, 参加者同士と交流できましたか。	.200	.018	.505	4.25 (0.84)	4.28 (0.80)	4.21 (0.90)	0.60
	g. 材料・用具とその扱い等を理解することができましたか。	.339	.063	.269	4.53 (0.67)	4.44 (0.71)	4.67 (0.58)	2.67 **
因子相関: 因子1-2=.631, 因子1-3=.373, 因子2-3=.312								
(因子分析から除外した項目)								
	o. 全体として, 今回の講座には満足することが出来ましたか。				4.83 (0.42)	4.79 (0.46)	4.88 (0.36)	1.60
	p. 今後, 機会があればこのような活動には参加してみたいと思いますか。				4.89 (0.38)	4.88 (0.35)	4.91 (0.42)	0.49
(註3) 項目に付されたアルファベットは質問紙における順序を示す					*** p < .001, ** p < .01, * p < .05, + p < .10			

各項目の平均値を比較したところ、因子1「作品、活動への理解」および因子2「活動に対する関心、意欲」のいくつかの項目、また総合評価である項目p「全体として、今回の活動には満足していましたか」において、いずれも平成19年度の得点が有意に高かった (Table 4)。

次に、講座に対する子どもの満足度の規定因、すなわち、講座に対する子どもの満足度はどの要因によって左右されるのか、という点について探索的に分析する。具体的には、重回帰分析を用い、合的評価の項目である項目p「(子どもは) 全体として、今回の活動には満足していましたか」を従属変数とし、その他の質問項目がどのくらい説明するかについて、質問項目の得点を投入後、ステップワイズ法により説明変数を選択した (Table 6)。分析の結果、年度全体の決定係数 (R^2 (自由度調整済み、以下同じ)) = .392であった。説明変数として選択されたものは、因子2に含まれる項目c「作品づくりに興味関心を持つことができましたか (標準化偏回帰係数 (β) = .312)」、項目i「自信を持って制作に取り組むことができましたか (β = .193)」、因子3に含まれる項目k「活動の中に、色やかたちなどとの新たな出会いがありましたか (β = .161)」、および各講座独自の質問項目である項目n (β = .270) であった。この結果から、子どもが各講座の内容に沿った作品に対して興味を持つことが、講座に対する子どもの満足度に関与していることが考えられる。特に、講座の内容が固定している平成19年度の講座における項目n「叩く、振る、吹くなどの遊びを楽しみながら制作に取り組むことができましたか (β = .429)」の係数が高いことから、音を使った遊びにおいては、講座独自の内容に興味を持つことが子どもが活動に満足する要因となっていることが考えられる。

講座に参加した感想 質問項目について、因子分析により項目を集約したところ、3因子から成ることが示された。因子負荷量0.35以上の項目を因子項目として、それぞれの因子に含まれ

Table 6 「講座における子どもの様子についての感想」に関する重回帰分析の結果

(ステップワイズ法により投入された項目の標準化偏回帰係数を表記。*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$)

従属変数:p. 全体として、今回の活動には満足していましたか	全体	H18年度	H19年度	
	決定係数(自由度調整済 R^2)	.392 ***	.329 ***	.466 ***
因子1: 作品、活動 への理解	b. 作品例や説明を通して、つくり方を理解することができましたか。			
	d. 用具の使用や片付け、マナー等を理解することができましたか。			
	e. 事前に考えたスケッチ等を具体的にかたちにすることができましたか。			
	i. 自信を持って制作に取り組むことができましたか。	.193 **	.240 **	.219 *
因子2: 活動に対する 関心、意欲	g. 時間配分にゆとりをもって取り組むことができましたか。			
	c. 作品づくりに興味関心を持つことができましたか。	.312 ***	.364 ***	.208 *
	a. 活発で明るく、安全に活動することができましたか。			
	f. 自分のアイデアや思いを活かして自己を表現することができましたか。			
因子3: 新しい体験	k. 活動の中に、色やかたちなどとの新たな出会いがありましたか。	.161 **		
	l. 他の子どもたちの作品と比べてみることなど、客観的に自分の作品をみる ことができましたか。			
	h. つくっている最中にわからなくなるなど、困ったことがありましたか。			
	j. 作った作品に対して、感想を言ったり、保護者と話し合ったりしましたか。			
	m. 他の子どもたちや指導者とうまくかわることができましたか。			
	n. 叩く、振る、吹くなどの遊びを楽しみながら制作に取り組むことができ ましたか。(註4)	.270 ***	.246 **	.429 ***
	o. 音の仕組みを自分なりに理解し、楽器づくりを楽しむことができた か。(註4)			

(註4) 項目n,oは講座内容ごとに異なるため、項目の例を示す

る因子項目の特徴から、因子1を「子どもの意欲を高める援助」、因子2を「子どもへの技術的な援助」、因子3を「参加者、地域との交流」と命名した (Table 5)。

先述した講座における子どもの様子についての感想と同じく、各質問項目においては、5段階評価において平均値が4を上回る項目が多く、本講座は保護者が子どもと関わることに於いて有意義な場となっていたことが伺われる。年度ごとに各項目の平均値を比較したところ、因子2「子どもへの技術的な援助」の項目を中心に、平成19年度の得点が有意に高かった (Table 5)。

次に、講座に対する子どもの満足度の規定因、すなわち、講座に対する子どもの満足度はどの要因によって左右されるのか、という点について、上述の講座における子どもの様子についての感想と同様の手法で探索的に分析する。具体的には、重回帰分析を用い、合的評価の項目である項目o「全体として、今回の講座には満足することが出来ましたか」を従属変数とし、その他の質問項目の得点を投入後、ステップワイズ法により説明変数を選択した (Table 7)。なお、項目p「今後、機会があればこのような活動には参加してみたいと思いますか」は全体評価に類似する項目であると考えられるため、分析から除外した。分析の結果、年度全体の決定係数 (R^2) =.324であった。説明変数として選択されたものは、因子1に含まれる項目k「今回の活動は、子どもの創造性を発展させることにつながると感じましたか ($\beta=.215$)」、項目i「子どもに自信をもたせるように、励ます、褒める、共感することができましたか ($\beta=.151$)」、因子3に含まれる項目n「今回の講座により、栄区の子育て支援事業に対する理解が深まりましたか ($\beta=.391$)」、および項目g「材料・用具とその扱い等を理解することができましたか ($\beta=.270$)」であった。一方、項目j「自分の考えを子どもに押し付けずに、子どもの考えに共感しながら制作することができましたか ($\beta=-.190$)」は係数が負であり、満足度を抑制する項目として挙げられた。この結果から、保護者が講座および子どもの活動に対して積極的に関与できることが、保護者の講座に対する満足度に関与していることが考えられる。

Table 7 「講座に参加した感想」に関する重回帰分析の結果

(ステップワイズ法により投入された項目の標準化偏回帰係数を表記。*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$)

従属変数: o. 全体として、今回の講座には満足することが出来ましたか	全体	H18年度	H19年度
決定係数(自由度調整済 R^2)	.324 ***	.300 ***	.388 ***
i. 子どもに自信をもたせるように、励ます、褒める、共感することができましたか。	.151 *		
h. 制作時間の配分にゆとりをもって取り組むことができましたか。			
a. 子どもが活発で明るく安全に活動できるように援助することができましたか。			
因子1: 子どもの意欲を高める援助			
b. 子どもの興味関心をもたせるような声掛けができましたか。			
j. 自分の考えを子どもに押し付けずに、子どもの考えに共感しながら制作することができましたか。	-.190 **	-.180 *	
f. 子どもが実行不可能な思いを実現しようとしていて、どのように援助したらよいか、難しさを感じることはありませんでしたか。			
k. 今回の活動は、子どもの創造性を発展させることにつながると感じましたか。	.215 **	.263 **	.202 *
d. 子どもが事前に考えたスケッチ等を具体的にかたちにするように援助することができましたか。			
因子2: 子どもへの技術的な援助			
e. 子どもの考えたかたちを具体化するために、子どもと一緒に手順を考え、制作に取り組むことができましたか。			
c. 用具の使用や片付け、マナー等を子どもに理解させることができましたか。			
m. 今回の活動は、地域コミュニケーションの輪をひろげ、豊かな人間づくりや社会づくりに貢献するものだと思いますか。			
因子3: 参加者、地域との交流			
n. 今回の講座により、栄区の子育て支援事業に対する理解が深まりましたか。	.391 ***	.271 **	.414 ***
l. 参加者と指導者、参加者同士と交流できましたか。		.251 **	
g. 材料・用具とその扱い等を理解することができましたか。	.128 *		.236 *

(3) 実践の立場から—実践における効果や問題点,改善点

造形表現における子どもの意欲と親子の関わりから 完成した作品からわかることは、「型」を利用して自由に制作することが、幼児の制作意欲を引き出しながら活発に活動ができたということである (Fig. 7)。磯部 (2006) が「自発的で発生的な『描く』という行為は、『感じ取る』ことによって生まれてくるといえます。つまり、『感じる』ことなくして、『描くこと』は生まれにくいということです」と指摘しているように、自発的な行為がなければ絵を描くことは始まらないが、他の子どもたちと比較することができる共同制作に

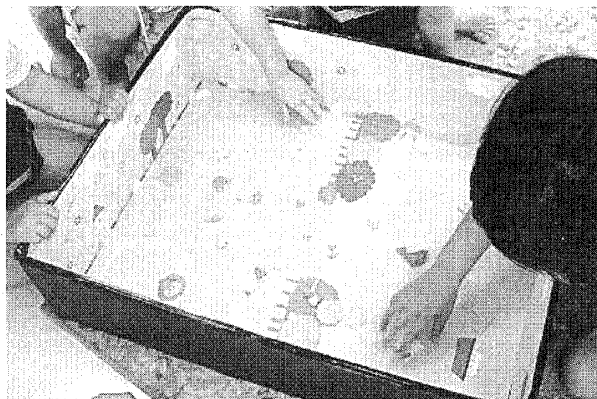


Fig. 7 「型」(箱庭)をイメージした粘土づくり

においては、ある程度のかたちを準備しておかなければ、イメージを共有することが難しくなってしまう、制作に対する動機づけが低下してしまうことにつながりかねない。矢野 (2006) は、大学の造形教育において、教育者が個々の学生の問題意識に応じたアドバイスを行う上で、「型」を用いた実践を行っている。その結果、型を用いた制作は「つまずき」が少なく、学生それぞれが程度の差はあれ達成感を味わい、造形を苦手とする大学生も自らつくることの喜びを見出すことが可能であった。そこで本実践においても様々な「型」を使うことにより、子どもたちの意欲を引き出すことを実践によって試みた。その結果、活動の冒頭において親子がイメージを持つことができ、活動に入る場面でのつまずきも少なく、イメージを共有しながら自己のアイデアを活かして活発に制作活動できる可能性が示され、アンケート分析結果における「活動に関する関心・意欲」の項目からも明らかとなった。

また、項目nにみられるように、ただつくるだけではなく体を使って音を出すといった行為そのものを取り入れたことも、子どもたちが活発に制作に取り組む意欲につながる事が明らかとなり、今後の造形ワークショップとしての新たな展開が期待できる結果となった。

保護者の造形に対するイメージから 親が子どもの技術を支援し、声掛けを行いながら制作ができることは、子どもたちの安心感へとつながり、子どもをつくりたいかたちを引き出して達成感を味わうことが可能であることが、実践を通して実感したことであり、アンケート分析結果 (Table 5) においても示された通りである。さらに、親が制作に不安を感じないように、そして子どもが楽しく制作を行うことができるように、実践者が支援していくことも重要であることがわかった。

また、矢野・高垣・田爪 (2007) が平成18年度・第1回実施におけるアンケート自由記述で明らかにしたように、親子共に自宅では行うことが困難な絵の具や粘土などの造形活動を希望していることが多い。特に、体全体を使って汚れてもよいような教材 (Fig. 8) を希望している親もあり、家ではできないながらも、造形に期待している部分も多いことが伺われた。また、親子で一つの作品をつくりあげることを通して、子どもの新たな一面などが発見でき、親たちの造形に対する理解を得ることができたことも大きな成果といえる。しかし、実践によって絵の具や粘土を選択するため、親が希望する通りにならないこともあり、今後の教材開発としての改善が必要であることが示された。

参加した学生の視点から 今回の実践に参加した学生が、子どもたちだけでなく、日ごろ関



Fig. 8 「型」絵の具を使って楽しむ



Fig. 9 親子とコミュニケーションをとる学生

わることが少ない親とのコミュニケーションの促進を通して (Fig. 9)、保育者としての前向きな姿勢と資質を涵養するうえで大きな効果が期待される。そのことを感じ取ることができる学生からの意見の例をあげておく。

「企画のアイデアを自分達で創意工夫する段階から携わり、材料の準備、ワークショップの運営まですべてに携わることで造形のアイデア・ひらめきが広がり、必要な準備や支援の方法も経験から学ぶことができた。これらの経験は、保育士として子ども達と造形を楽しむ際、知恵や技能となって生きていくと思う。また、毎回開催場所が変わることで、そのたびに初めて参加した親子連れの方も多く、この研究活動を通して数え切れないほどの親子と関わる事ができた。そして、それぞれの親子によって様々な子どもへのアプローチがあることがわかり、支援の方法も様々な対応をしなければいけないことを学んだ。これほど多くの親子と関わるという経験は、学生生活の中ではなかなかできないことである。この貴重な経験を、今後の保育士として不可欠な子ども・保護者とのコミュニケーションの力としてつけることができたのではないかと感じている。」

今後、継続的な実践を通して学生のこのような意識や態度がどのように変わっていくかというところを、具体的なデータとして導き出し考察を行っていく予定である。

行政の視点から 2年間を通じたアート・キャラバンについて、事業側からの効果的な実施方法という視点からの意見についても挙げておく。

「事業の性質上、幼児教育という側面を重視し、専門的な知識を持つ大学との連携により、事業精度を高めることができる実践となった。大学との連携によって、より地域に密着したサービスが可能となり、企画段階からの連携についても、専門的知識に裏打ちされた情操的效果の高い内容の実践が得られたのではないかと考える。事業実施への参加を得ることにより、子どもたちの心理・行動を理解した対応が可能となったことや、事業実施の結果に対し、より専門的な検証を行うことで、事業運営に効果的なフィードバックを行うことができた。」

子育て支援の一環として大学と連携することにより、大学のもつ知的資源を提供した実践を通して、広く栄区の子育て支援に有効であるという可能性が期待できる。

以上、今回の実践をまとめると、子どもと親とのコミュニケーションが促進され、また大学の指導者、学生と親子の間にも様々なコミュニケーションがみられ、さらに行政と大学との連携の重要性が示されたことで、この造形ワークショップが子育て支援に有効であることが示唆された。

4. おわりに

今回の造形ワークショップ「こどもアート・キャラバン」の実践は、栄区民に成果を一般公開している。出来上がった子どもたちの作品は「こどもアート・キャラバン展覧会」と題し、栄区民文化センター内ギャラリーにて約一週間の展覧会を2期（平成18年度は8月8日－13日と11月28日－12月3日、平成19年度は8月27日－9月3日と12月25日－1月7日）に分けて行った。第1回から第4回まで、延べ数にして1000人近くの入場者が来館し、広く栄区民の地域理解を得られることができた（Fig.10・11）。

「こどもアート・キャラバン」は平成20年度も継続して行うことが予定されている。そこで更なる改善を行うことにより、親子が造形を通して明るく活発に、そして安全に活動できるように支援する場を提供し、地域コミュニケーションの輪をひろげ、豊かな人間づくりや社会づくりに貢献できる子育て支援を目指していきたい。



Fig.10 第1回こどもアート・キャラバン展覧会場



Fig.11 第3回こどもアート・キャラバン展覧会場

引用文献

- 大都市子育て環境研究会（代表研究者：斎藤歎能）（2003）. 大都市の子育て環境における健康・心理面の課題分析に関する調査研究 平成14年度児童環境づくり等総合調査研究事業報告書
- 松永愛子（2005）. 地域子育て支援センターの役割について－状況の多重性の中での「居場所」創出の場として－ 保育学研究, **43**, PP. 166-178.
- 磯部錦司（2006）. 子どもが絵を描く意味 子どもが絵を描くとき, 一藝社, PP. 11-26.
- 矢野 真（2006）. 子どもの造形支援者育成のための‘型とかたち’－石の模刻制作における実践研究を通して－, 大学造形美術教育研究, **4**, PP. 2-7.
- 矢野 真、高垣マユミ、田爪宏二（2007）. 造形ワークショップを通じた大学と行政、地域の連携による子育て支援－横浜市栄区・鎌倉女子大学連携事業「アート・キャラバン」の実践を通して－, 鎌倉女子大学紀要, **14**, PP. 51-62.